九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

資料 山之口獏 ： 「自分のこと・淵上のこと」

松下, 博文
九州大学大学院博士課程

https://doi.org/10.15017/10411

出版情報：文獻探究. 22, pp.51-62, 1988-09-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

資料　山之口貘

――「自分のこと・淵上のこと」――

松下博文

ここに紹介する資料は創元社版『現代日本詩人全集』第十四巻（昭30・5）に附録として収録されていたものである。内容的に際立って新しい事項はない。ただしこの資料によって従来不透明だった部分がいくぶん具体的に把握できるようになったところもある。たとえば佐藤春夫邸を訪問した際の佐藤の口吻とその様子、そしてそのときの貘の心境。また、昭和十四年八月頃にはたとえ部分的であったにしても貘が「九州文学」を読んでいたという事実などがそれになろう。以下、叙述の中心を毛銭と貘との交友関係に絞り資料解説を試みたい。その場合、資料をより正確に理解できるように資料の背後に隠見するいくつかの事情を(I)「淵上毛銭とぼく」、(II)「詩経」、(III)「自分のこと・淵上のこと」という各パートに分けそれぞれの文献を引用しながら説明してゆくことにする。なお、論の展開上毛銭著「山之口貘（マヽ）いろ〳〵」[1]を第二資料として付すことにした。

I

〈貸し借りの片道さえも十万億土〉の絶句を残して昭和二十五年三月九日毛銭淵上喬は三十五歳の短い生涯を閉じた。貘は宿痾のカリエスに仆れたこの旧友を偲んで同年六月号「詩学」に「淵上毛銭とぼく」という追悼文を発表するのだがここには出版社の都合で公刊されなかった幻の毛銭詩集『ぶらんこ』[2]のために準備された文章がそのまま掲載されている。貘の手に成るものでは唯一の毛銭論といってよく、ひいては毛銭の詩と実生活を知る貴重な文献といってよい。引用しよう。

淵上毛銭の詩はおもしろい。あかるくて澄んでいて、澄んでいるくせにおもしろいのだ。彼の詩の出所の殆どが、悲痛を極めた永い間の闘病生活にあるのだが、そして、至るところにぴりりとする表情をもつて現われる感覚なども、異常な肉体的抵抗のなかにその根を張つてからんでいるのだが、そして、また、テーマの性格的な屈折などにしてみても、それはまたそのまま、世にも不快な条件のもとにああなりこうなりして生きてねている彼の、勝気な性格の屈折なのであるが、にもかかわらず彼の詩は、おもしろくて澄んでいるのである（略）僕は、過日、熊本県水俣町陳内に、淵上毛銭を訪ねた。貘さんには、十五年ぶりだ。と彼は云つて、ぼくのことをよろこんで迎えてくれたのだが、むかしに変わらぬはつらつとした声が、むかしの坊やの声そのままなのが非常にうれしかつた。彼は、木製の寝台に仰になつていて、そこには、彼のいわゆる、硯のようにへこんだ胸があつた。彼はそのへこんだ胸の上に、座布団型の砂袋をのせて、その重みを、寝ているうすつぺらな自分のからだの文鎮みたいにして、静かに暮らしていた。

表現生成の原拠を〈異常な肉体的抵抗〉と〈勝気な性格の屈折〉をかかえこんだ〈悲痛を極めた永い間の闘病生活〉に見、かかる性格と実生活ゆえにその作品世界に〈ぴりりとする表情をもつて現われる感覚〉や〈テーマの性格的な屈折〉が描出されていることを見

逃すことなく指摘する貘の眼光は炯々として鋭い。が、しかし、毛銭の詩作から貘の理解と同質域のそれをはたしてわれわれは容易に読み取ることができるか。少なくともわたくしには貘のいうピリリとする刺激感覚やテーマの屈折的な設定を読み取ることは容易ではない。否、むしろ、これらとはほど遠い地点にその言語空間は成立しているように思える。たとえばそれは同じ結核に仆れていった暮鳥土田八九十の遺稿集『雲』（大14・1）に収録されている〈おういい雲よ／ゆうゆうと／馬鹿にのんきさうぢやないか／どこまでゆくんだ／ずつと磐城平の方までゆくんか〉（「雲」）のような平明で宗教的に昇華された世界ときわめて近いもののように思われる。[3] 処女詩集『誕生』（昭18・1）に収録されのち第二詩集『淵上毛銭詩集』（昭22・7）に再録され、また、不運にも公刊されなかった幻の詩集『ぶらんこ』と同題の次の一篇を見ていただきたい。暮鳥の世界と近似的な位置にその作品世界が成立していることに気づくはずである。〈ぶらんこに／乗つて／仰向けに／ゆられてゐると／オルガンを／聞いてゐるやうだ／明日も／オルガンに／乗つて／あの／雲に逢はう〉。

《『淵上毛銭詩集』におさめた作品は、そのほとんど全部が短く枯淡である。それらの詩にはユーモラスな含みもあるし、一種の稚拙な面白さも試みられているけれどそれすらも枯淡であろうとした心情に包括されてしまう。すべての強烈なものからはなれて、淡い色で人生の景像が描かれている。このような境地にうまれた作品は、言葉のアクセントや表現型態そのもので人に迫ることがない。注意して読まなければ作者の趣意は見過されてしまうし、作品の主題も定かには知られない。したがつてこういう性格の詩が人に呼びかけるかどうかは、それを読む人の側に主点があるということになる。毛銭の詩はそういう淡い心意と言葉で成立つている》。伊藤信吉氏[4]の評である。引用した詩作には確かに強烈な《言葉のアクセントや表現型態》は皆無であろう。それを伊藤のいう《淡い心意と言葉》で成立している世界といいかえてもよい。この《注意して読まなければ作者の趣意は見過されてしまうし、作品の主題も定かには知られない》表現形態のわずかな隙に貘は毛銭の特異な感覚と屈折とを見た。いわば見えにくい企図とテーマと感覚を詩人の鋭い感性がすばやくキャッチしたということになろう。〈淵上毛銭の詩はおもしろい〉とキッパリ断言し、続けて〈あかるくて澄んでいて、澄んでいるくせにおもしろいのだ〉といくぶん曲折的にその面白さの内実を補足説明しなければならなかったのは一見明るく透明に見える「オモテ」の世界（これはわれわれにも容易に読み取れる）の対極に〈ぴりりとする表情をもつて現われる感覚〉や〈テーマの性格的な屈折〉をもつ陰画としての「ウラ」の世界がちらちら見え隠れしていることをよき理解者として十分に認識していたからにほかなるまい。ともすればわれわれは作品の生命線ともいえる文体・テーマ・メタファー・ことばの呼吸といった詩的表現の直接的な属性部分を不測にも読み過ごしてしまいがちだが貘は詩人として、また、友人としての確かな目でこの属性部分をみごとに捉えていた。そしてそこには十九歳で沖縄を出奔し、以来、書籍問屋の発送荷造人、ニキビ・ソバカスの薬の通信販売、おわい屋、暖房屋、鉄屑運搬船の乗員など実社会の底辺部を総舐めにして生きながら独自のユーモアと風刺とペーソスを表現の基調として詩作活動をしてきた貘の姿が鮮やかに重なる。

冒頭の文章を再読されたい。貘は毛銭を論じているか。必ずしもそうともいえまい。毛銭を語りつつ実は己れを語ってはいまいか。毛銭に見る刺激感覚やテーマの屈折的な設定、さらには〈世にも不快な条件のもとにああなりこうなりして生きてねている〉姿はずば

り現実の貘の詩と実生活そのものであろう。人が積極的にある事柄を評価するときそこには自己の実体験に支えられた他者へのアイデンティティーが存在する場合が多いのだがこの文章もまさにそれであろう。かかる感情の交流は古く昭和初期にまで遡れる。

Ⅱ

両者の出会いは昭和四年のことである。[5] ときに毛銭十四歳、貘二十六歳。その場面を火野葦平「詩経」[6]に見てみよう。

或る日、喬はシゲから、「この方、お灸の先生よ」といつて、一人の小柄な青年を紹介された。まだ三十には遠い年配で、色の浅黒い精悍な顔立ちだが、目の奥に深い湖の底をのぞかせるやうな光があつた。奄美大島生まれと聞いて、遠い琉球を思ひ出した。無造作な服装で、態度も投げやりだったが、ひどく几帳面な一面もあつて、喬はこの男に興味を感じた。小野シゲは灸が好きで、いつもお灸で治らぬ病気はないといつてゐた。実際に手をとつて、灸のする方、艾のえらび方、病気によつてちがふ人体における灸の壺などを教へることがあつた。ところが、シゲの紹介した山之口貘はもつと専門家であつた。近くの両国ビルディングに一室を借り、そこに住んでゐる貘は灸の通信教授の助手をしてゐるとのことで、灸に関するあらゆる知識を持つてゐた。喬には灸のことなどわからないし、あまり興味もない。しかし、灸のことを語りあふ二人の話はどこか神秘的で面白かつた。灸は科学だといつてゐるのに、夢のやうでもあり詩のやうでもあつた。貘は詩も書いてゐるやうだつた。喬は貘が店に来ると、自分で新しいコーヒーや紅茶を二つ入れ、それを持つて貘のテーブルに行つた。向かひあつた二人はどちらも重い口調で、ぽつりぽつりといろいろなことを話しあつた。どちらも南国ではあるが、九州の南の果の沖縄の話は面白く、喬は倦かずに聞いた。水俣に行つたことのない貘も、湯児、湯出の両温泉、長崎のペーロンに似た龍頭船が水俣川で競争する夏祭、風土病である象皮病などに好奇心をわかして、喬の話に聞き入つた。「貘さんの詩を、僕がいつかチエロで弾く日が来るかも知れませんね」上機嫌で、喬はそんなこともいつた。

毛銭は大正四年一月、熊本県芦北郡水俣町陳内に旧家の次男として生まれている。本名は喬。幼少より腕白で悪童の名が高かったといわれる。このようなわが子の将来を案じた両親は十二歳のとき熊本市内のルーテル教会系私立九州学院に毛銭を入学させた。ここの寄宿舎でのち火野葦平の妹婿となった深水吉衛と一緒になるのだが毛銭のチェロへの傾倒は音楽家志望の彼の影響が大きかったようである。昭和四年十四歳のとき母の姉方の成田ヨシの養嗣子となるため上京。青山学院中等部へ転校する。しかし、学業を怠りさらには相変らずの腕白奇行ぶりを発揮したため放校処分をうけた。このとき養母ヨシは肥後の殿様であった細川侯の屋敷勤めをしていたが毛銭の奇行に手をやき同家の子女に対する悪影響なども考慮して外での下宿をしぶしぶ許す決意をする。それまでの毛銭の強い希望が容れられたかたちでもあった。下宿は青山学院中学時代の家庭教師であった小野八重三郎の斡旋で小野夫婦の経営する喫茶店「ハンロー」からさほど遠くない位置に定めた。チェロ弾きの少年はここに自由の空気を満身に吸う喜びを与えられたといってよい。貘との出会いはこの頃のことである。おそらくそれは火野の叙述にほぼ近いものであったに違いない。[7]

ときに貘は郷里を再出奔して五年目。その間定職を得られずルン

ペン同然の生活を送っていたが折しも「ハンロー」近くの両国ビルディングの空室を住居にして東京鍼灸医学研究所の通信事務員として職に就いている。そのときの鍼灸専門家貘の姿を火野は〈色の浅黒い精悍な顔立ちだが、目の奥に深い湖の底をのぞかせるやうな光があった〉〈無造作な服装で、態度も投げやりだった〉と書いていたが若い毛銭の目にはいかに映じたか。実はそれを伝える好資料がある。資料②を参照されたい。この資料は新資料発掘の副産物として出てきたものだが当時の貘の風貌をよく伝えるもののひとつであろう。〈黒い皮カバン〉に常時鍼灸の道具を入れ、〈特徴のある大きな目と深い憂愁を漂はせた〉〈骨組のがつしりとした、額の禿げ上がつた〉青年。そしてまた年中熱いコーヒーしか飲まない嫌な野郎。後者はいかにも勝気な毛銭ならではの心情を吐露しているがこれが毛銭の目に映った貘の実景であった。以来急速に二人の交友は深まってゆくのだが当てなくさすらう放浪者の宿命とでもいおうかいつしか音信が途絶えてしまい、さらには毛銭も病を得て故郷熊本に寝ついてしまった。再び交流が始まるのは十数年後のこと。昭和十四年八月号「九州文学」に発表された「山之口貘いろ〳〵」（資料②）をその契機とする。熊本に戻った毛銭は音楽家を断念して文筆活動を開始していたのであった。

毛銭が「九州文学」に自詩を発表し始めたのは昭和十四年六月のこと。同月号掲載の「金魚」が最初である。〈あなたも　泣いて　と女は云ふ／女は天国の金魚だ／接吻なんていやよ／私は神様が教へてくださつた外／何も知らない／女は／裸で飛んで見せて　といふ／地獄の金魚に／私はなりたい／あなたは　泣いてるのと　女は云ふ〉。同誌の中心的存在であった原田種夫は七月号でさっそくこの異才な新人を紹介する。ランボーならぬ人生斫断家毛銭の詩と人生を詩作から受けた印象から書き起こし真の芸術作品への批判の在り方を論じつつ毛銭を叱咤激励して擱筆する運筆は原田の毛銭に対するこまやかな愛情とかかる新人を発掘できた自負が伺えて興味深い。[8] 爾後「花乞食」「てふてふさん」「家系」「きんぴら牛蒡の歌」など生涯の代表作を次々と発表してゆくがここには己れの余命を感知して悔いなき一生を終えたいと願い、ために死力を振り絞って創作に精魂を傾けている鬼気迫る毛銭の姿が看取される。思うに苦しくも生涯で最も充実していた時期であったに相違ない。かような時期に再び交流が始まりそして再会する。再会を願う毛銭の気持ちが遠く茨城の地に疎開していた貘の心底を激しく揺り動かした結果であった。新資料はそのことを明確に示していよう。再三再四にわたって再会を希求する速達や電報が貘の許へ連日のごとく届けられていたのである。[9] かかる執拗な要求に折れた貘は水俣に毛銭を訪ねた。昭和二十三年一月のことである。[10] 冒頭に引用した文章を再び見ていただきたい。毛銭の喜びは想像するに余りあろう。そしてまた病臥の毛銭に接した貘の悲しみも想像するに余りあろう。何と平板な〈文鎮〉であり何と平板な〈硯〉のような現し身であるか。「生」の残骸が残り二年の命をのっぺりと呼吸しているだけではないか。十数年ぶりの再会にしてはあまりに悲しすぎる変貌しすぎた再会であった。水俣での以後の両者の言行については「箱根と湯之児」に詳しい。参照されたい。

Ⅲ

毛銭の詩と実生活および貘との交友関係をいくつかの文章を利用して祖述してきた。これらのことを念頭に置いて最後に新資料を説明してゆこう。いうまでもなく資料は大きく〈自分のこと〉〈淵上のこと〉の二つの部分から成る。まず、前者を見てみよう。

資料劈頭に見る貘の再上京の時期は現在のところ明確ではない。貘の記憶が搖れているからなのだが一応大正十三年夏以降から十四年のことであるらしい。[11] ゆえに佐藤春夫邸訪問はそれ以後同十五年までのことであるといってよい。再上京の経緯については本資料が収録されていた創元社版『現代日本詩人全集』掲載の「自伝」に詳しく、また、佐藤春夫邸訪問については「ぼくの半生記」（「沖縄タイムス」昭33・11・25～12・14）に詳しい。

大正十二年の九月一日の関東大震災のおかげで、一時、帰郷したのであるが、当時、父が、鰹節製造の事業に失敗したばかりのところで、家を失ひ、家族は四散し、ぼくはぼくで、許婚の女性からは棄てられ、その上、二度目の恋愛にも破れたといふ風なことばかりが重なり合つて、かうした環境が、ぼくの放浪を本定りにしたやうなもので、どうやら、詩にかぢりついて生きたくなつたのもそれからなのである。大正十三年の夏、着のみ着のまゝで、詩稿だけを携へて、ぼくはまた上京、昭和十四年五月頃までの大半を、一定の住所を持たずにすごした。

（「自伝」）

佐藤春夫を知つたのは、大正の終りごろである。小石川の小日向町にあった佐藤氏宅を、はじめて訪ねたとき、玄関をガラツと開けると、玄関に近い部屋から、佐藤さんは座つたまま顔を向け、「何か用か」と、ぶつきらぼうな声できいた。用がなくて、ひとさまの家を訪ねるやつもあるまい、とぼくは腹の中では思いつつも玄関に突つ立つたまま「詩の原稿を見ていただきたいとおもつて、まいりました」と、来意を告げると佐藤氏は、すこぶる素ツ気ない返辞をした。「みてやれないこともないが、今日は駄目だ」というのである。「それでは、いつ、みていただけますか」ときくと、「いつみてやれるかはわからないが毎日来てみるんだね。そのうちにはあるいは、みてあげる機会もあるだろう」とのことである。ぼくはそのまま佐藤氏のお宅を辞したのであつた。

（「ぼくの半生記」）

帰郷の原因・帰郷後の状況・詩作活動決意の動機・再上京の時期・佐藤邸訪問の様子など列記した文章によって大略理解できたかと思う。特に佐藤氏訪問の場面は資料と相互補完的に読まれたい。内容的にはまったく同一ではあるが細部の記述に若干の相違が認められるからである。

前者後部の佐藤春夫「放浪三昧」についても略記しておこう。この小説は貘をモデルにしたいわゆるモデル小説であるといってよい。発表は昭和八年「週間朝日」新年号。〈ある詩人の話〉という副題をもち主人公大野豹が過去の閲歴や現在の生活状況などを縷々語るという形式をとる。資料にいう該当箇所は佐藤の邸に多数出入りする人間の中で大野に出入りを許可したその理由が述べられている部分である。〈僕は才能のない人間の出入はさう迷惑にも思はぬが、ものわかりの鈍いのと対話するのや、更に人の悪いのが家庭に出入するなどに至つては、申すまでもなく禁物だから、これらの点を明にするためには、時には初対面をも忘れて大声を発しなければならぬ場合さへ生じて来る。ところで大野の場合は、その作品から受ける印象によつても判断出来たが、またその応対の態度の内気で温順な――といつて決して卑屈げなおべつかなどのない品位のある点、それからずばりと正直に本音を吐くあたり、その才能とともに、その人間をも先づ許してよからうと思つたものであつた〉（以下傍線松下）。かようにして貘は佐藤邸への出入りを許されたわけだがそこには同郷の宮城聡[12]の尽力もあったらしい。「放浪三昧」は次のように書く。〈大野が最初僕を訪うた時には、某社記者のM君（改造

社記者の宮城――松下註）から同郷の出身で詩に志してゐる青年として、詩稿の一閲を頼むという紹介であつた〉。宮城の紹介状をもって佐藤邸をたずねたこの訪問がその後の貘と佐藤の関係を決定的にしたといえる。処女詩集『思弁の苑』（昭13・8）所載の佐藤の序文「山之口貘の詩稿に題す」はかかる宮城の陰の力があってはじめて賞いえたといっても過言ではないだろう。

後者を見てゆこう。二節で示したように両者が再び交流を始めるのは昭和十四年八月号「九州文学」掲載の「山之口貘いろ〳〵」をその直接的な動因とする。〈ある人がとどけてくれた「九州文学」誌上〉の文章とはこの文章をいう。そこにはいわゆる「尋ね人」という形で貘の所在を知りたい旨が書かれているが〈何の因果か私も詩を書く様になつたが思へばお可笑しなものさ。彼が拙ない僕の詩を見たら驚いて目をまわすだらうと思ふと愉快でならぬ〉なる文句に接したとき毛銭が詩作をしていることを貘ははじめて知ったのであった。〈あの頃のチェロ弾きが詩を書くやうになつたので貘さんがびつくりするだらう〉という表現は上記傍線部とは辞句の上では正確には対応しないがこの部分は傍線部を貘が簡略に叙したものであると見てよいだろう。再会の場面は前述のとおり。具体的には註(8)(9)を再度参照していただきたい。詩集『誕生』は一節に明記したように昭和十八年一月の刊行。出版社は東京の詩文学研究会である。ときに貘はこの詩集に次のような序詩を寄せている。(13)〈十年前の／未来のチェロ弾きよ／チェロは弾かずに／うたったか／きけばずいぶん／ずいぶんながいこと／チェロを忘れて仰臥ているとか／チェロの背中もまたつらかろう／十年前の／あのチェロ弾きよ／チェロは鳴らずに／詩が鳴った〉（「チェロ」）。詩的結晶度が決して高いとはいえない作品ではあるのだがそれだけに殊更な技巧や感情はみられず十数年来の知友の処女詩集に寄せる一篇としては愛情溢れる最高の作品であるといえよう。貘の人柄をきわめてよく伝える詩篇である。〈毛銭の在京中の一時期を世話してゐた○氏夫妻〉とはいうまでもなく小野八重三郎・シゲ夫妻のこと。これも叙上のとおりである。

○

『現代日本詩人全集』は各巻ごとに「詩人と詩集」という附録を付けるようになっている。「自分のこと・淵上のこと」は第十三回配本第十三号（十四巻）のそれに収録されていたものである。同号「目次」をあげよう。

「私の処女詩集」の出るまで……岡崎清一郎
自分のこと・淵上のこと　……山之口貘
菊岡久利さんと横光さん　……阿部喜二
詩人と友情　……藤原定

岡崎、藤原の名が見えるが十四巻には岡崎清一郎・山之口貘・菊岡久利・大江満雄・藤原定・坂本遼・淵上毛銭らいわば《現代詩史の片側をそれぞれ特異な色彩によつて塗りあげていつた七人の詩人》（「編集後記」）の作品がその強烈な個性をあたりかまわず放散させている。いずれも「歴程」「鍋鑼」「学校」などの現代詩の一コマを綾取った同人誌に関与していた人々たちで苛烈な人生を歩んできた詩人たちである。毛銭にしろ貘にしろ然り、贅言を要すまでもない。しかしながらこれらの詩人たちは現代詩研究の中では従来不遇をかこっている。現代詩のより正確な叙述のためにも、また、異才な詩人たちの復権のためにもぜひとも研究の深化がなされねば

なるまい。かかる状況の中で今回ここに貘と毛銭の関係を資料紹介という形を取りつつも知りえるかぎりの文献で素描できたことは何かしらの意義があることと思う。調査の途中「九州文学」誌上の「山之口貘いろ〳〵」を蒐集できたことも収穫の一つであった。両者の関係についてはまだかなり不明な点が多い。大方の御教示を賜りたい。

註

(1) 「九州文学」昭和十四年八月号発表。ただし発表誌目次では「山之口貘のこと」となっている。〈十四・六・九〉の制作付記をもつ。

(2) 『ぶらんこ』は昭和二十三年の初夏に八雲書店から公刊される予定であったが出版界の不況のため中止された。「淵上毛銭とぼく」にはその経緯とそのときの原稿についての記述が見える。ここにはこの詩集の構成についての貘の叙述を引用しておく。巻末から巻頭にかけて製作年代順に配列したところは貘の処女詩集『思弁の苑』の作品配列と同じで興味深い。〈この詩集を編むに当っては、『誕生』以前の作品とそのなかからの作品と、『毛銭詩集』のなかからとその後の作品のなかからと、七十八篇を収めた。巻頭の「坂」から「合図」までのが近作。「風」から「白壁の家」までのが『毛銭詩集』、「椿」から「野原」までのが『誕生』、「小庭春恨」と「初夏」とが初期ので巻末という順序にした。〉

(3) 毛銭における暮鳥の影響については犬童進一「私の淵上毛銭ノオト」(「宴」10号・昭38・11)にすでに指摘があるが影響関係を詳細に論じたものではない。徳富蘇峰翁創設の淇水文庫(水俣市立図書館)に入れられた淵上毛銭文庫の中に『暮鳥詩集』(厚生閣・昭3・3)が見られるという事実の指摘にとどまる。この分野はこれから研究が進められねばならない分野の一つであろう。なお「熊本日日新聞」(昭42・6・9)掲載の原田種夫の記事の中にも毛銭の中に暮鳥の系譜を見るという一文がある。毛銭に暮鳥と等質の宗教的命脈が流れていることは確かなようである。

(4) 伊藤信吉「解説」(創元社版『現代日本詩人全集』第十四巻・昭30・5)

(5) 管見に入った限りで出会いの場面についての文献を記せば毛銭側からの資料としては㋑「山之口貘いろ〳〵」(資料②)のみ、貘側からの資料としては㋺「淵上毛銭とぼく」㋩「自分のこと・淵上のこと」(資料①)㋥「葦平と毛銭とバク」㋭「葦平さんとの縁」がある。その状況などは各文献大差なく「詩経」に描かれているそれとほぼ同じである。だが、時期については毛銭と貘の記憶に差異が認められる。㋑は昭和七〜八年頃のこと(これは㋑執筆時期から〈六七年前〉を引いて算出)、㋩㋥㋭はそれぞれ〈昭和の初年の頃〉〈昭和の四年か五年の頃〉〈昭和の初期〉のこととする。本稿では両者の諸年譜を参考にして一応昭和四年を出会いの時期に定めておいた。なぜなら㋑に見える〈六七年前からの知り合ひ〉というのは貘と親しく話すようになって〈六七年〉という意味に解釈され昭和七〜八年頃がその時期であったと推定されるからである。出会いの場面につづく〈尤も口をきく様になつたのはずつと後の話だが〉という追記や〈その頃何かの雑誌で佐藤春夫氏が彼らしいのをモデル

にして書いてるのを読み、どうも貘さんのことらしいがと先生に話をした。そうらしい、お前話をして見ろと云はれて、おそらくそんな機会から話す様になつた。そしてモデルが彼氏であつたことに狂ひはなかつた〉という記述はかような考えを可能にしてくれる。貘をモデルにした佐藤の「放浪三昧」は昭和八年一月号「週間朝日」に発表されているのでかかる判断はさほど見当はずれではあるまい。厳密にいえば昭和八年一月以降二人の関係は親密になったといってよい。とするならば毛銭は昭和八年頃までは東京に住んでいたことになるがこの事実については現在のところ筆者に確証はない。御教示願いたい。ともあれ、ここでは昭和四年に両者は出会い、同八年頃親しく交流するようになったと理解しておきたい。

(6)

昭和三十年四月号「群像」に発表。のち「ある詩人の生涯」と改題。亀井勝一郎の好意的な評を次に引こう。《「ある詩人の生涯」は、実在の人物淵上毛銭の生涯を描いた一種の伝記小説と言つていゝだらう。実名の人物も多く登場するが、火野文学の中でも出色の作品と言つてよい（略）火野自身、詩人であつたが、詩を生み出す独自の土壌といつたものを凝視してゐるやうな作品だ。主人公の淵上の「病める生命」から一刻も目を放さず、その生命のふしぎな燃焼と、やがて残燭のやうに燃えつきてゆくところに生じた詩と詩人の風貌を描いてあますところがない。死の到来は絶対的であるといふ条件のもとに、人間の執念といふものがどのやうに開花するか。その痛ましさを火野は愛惜の情をこめて描いてゐるのだ。構成がよくととのつてゐるし、一人間の生涯の記録としてみても興味ふかい》（「作品解説」・講談社版『日本現代文学全集・火野葦平集』昭37・4）

(7)

火野の没後すぐに書かれた貘の「葦平さんとの縁」（「東京新聞」昭35・3・14）の中に〈「ある詩人の生涯」執筆のときは、毛銭についての資料を提供し、小野氏の未亡人を紹介したりした〉という叙述が見える。これから判断すると火野は「詩経」執筆のために毛銭とかかわりのあったさまざまな人々を訪ね精力的に資料を蒐集しているようである。出会いの場面にしても小野氏の未亡人から事実に近い状態の話を聞いたにちがいない。

(8)

毛銭にふれた原田の文章には「淵上喬君のこと」（「九州文学」昭14・7）、『実説　火野葦平』（昭36・7・大樹書房）、註(3)に示した「熊本日日新聞」（昭42・6・9）の記事などがある。就中「淵上喬君のこと」は㋑毛銭を世に出した記念すべき文章であること、㋺最も早い時期における毛銭の経歴が紹介されており伝記的資料としても価値があることなど資料的価値がきわめて高いものである。引用しよう。〈仰臥してゐるためペンではインクが思ふやうに出ないので鉛筆で書く、と言ふ断り書きをして淵上君は、数篇の詩を病床から送つてよこした。それらの詩は私に、瞬間加藤介春氏を思はせた。それほど異色ある作品であり、人生への一つの斫断を示してゐた。私は何のちゆうちよなく同人に推薦した訳である。淵上君は、肥後と薩摩の国境にあるフライパンの底みたいな芦北郡水俣町に、関節炎の身を仰臥し、仰向いたまゝで詩を念じ人生を思索しつゞけてゐる。大正四年生まれであるから、年齢的にも大へん若いのだ。若いけれどもその廿数年間の生活は、誠に複雑極まる流転荒茫の中に展げられ色色の現実の面にふれ様々な人生の臓腑に触手して来てゐるのだ。『九州学院を三年、それから東京青山学院中学部に転じて四年終了、東京音楽学校に入学チエロを二ヶ年

学び中途で退学した。その間作曲法を修得、退学後いろんな世界を覗き、京浜間川崎・横浜を根城に放浪三年余、その間の職業を列記すれば何時間と掛ります。短期間に自分でも驚くほど色々の経験又は、えらい人、まづしい人と友達になりました。病を得て昭和十二年帰国、水俣工業所なる酣酸瓶会社を設立、後関節炎のため病臥約一年となります』といふのが淵上君の来歴である。淵上君がよしんば病臥の詩人であらうとも、芸術作品の批判はどこ迄も厳正冷徹に行はるべきであらう、烈しくうち鍛はれなければならぬ。私はこの人の作品が多くの人鍛にへられ、鋼の如く磨き上げられることを念じてゐる。あへて、新同人、淵上喬君のために紹介の辯を致した次第である〉。

九州学院→青山学院中学部→東京音楽学校（火野葦平「詩経」によると上野の音楽学校ではなくて駿河台の分校）といういわゆる学歴については現在のところ仔細な調査報告はない。また〈昭和十二年帰国〉についても犬童進一氏作成の「年譜」（『淵上毛銭全集』・国文社・昭47・7）と食い違っており（犬童氏「年譜」では昭和十年八月以降の項がこれに相当するかと思われる）詳細な年譜考証が望まれる。ただ、この点については原田の文章が昭和十四年のものであることを考えると引拠した毛銭の記述が時期的に近いだけに〈昭和十二年帰国〉という毛銭の記述のほうがより事実に近いとも思われる。しかし他方、註(5)からも理解できるように毛銭の場合叙述にかなり曖昧な点もあり明確な判断は下しがたい。今後の課題としたい。

(9) 手紙の頻繁な遣り取りについては「淵上毛銭とぼく」「箱根と湯之児」「葦平と毛銭とバク」「葦平さんとの縁」にも見える。

(10) 思潮社版『山之口貘全集　第四巻評論』（昭51・9）所収の「年譜」や最も新しい同社版『現代詩文庫　1029　山之口貘』（昭63・4）所収の「年譜」には昭和二十二年の項に〈暮、水俣に病床の淵上毛銭を見舞う。翌年正月にかけて毛銭宅に十日間滞在〉と記す。この記述はいかがなものか。この叙述だと「暮れから正月にかけて十日間滞在」と理解せざるをえないが事実はどうやらそうではないらしい。左記の文献を見ていただきたい。〈敗戦後のこと、熊本の水俣へ行ったことがあった。ぼくの若い友人淵上毛銭が十年余りも水俣で病んでいて、生きているうちに、どうしても一度会いたいから、水俣まで来てくれと、なんども、なんども、手紙や端書、あるいは電報、速達でそう云って来た。正月の半ば過ぎであったが、往復の切符を買って、水俣の毛銭を訪ねた（略）さて、毛銭のいわゆる生きているうちの一度の対面が四、五日もつづいたので、もうそろそろとおもい、帰りの切符を示すと、毛銭は、「一寸その切符を拝見。」と云って、ぼくの手から受取ったが、そのまま眼の前で破いてしまったのである。結局、ぼくはそのまま、十日ばかりの間いつづけて飲みつづけたのであった〉（「箱根と湯之児」）。〈昭和二十二年の末ごろになって、毛銭は速達や電報を何度も寄越した。生きているうちに、もう一度是非会いたいから、水俣まで来てもらいたいというのが速達や電報の用件なのであった。明けて二十三年まだ寒いころであったが、風邪をひいたまま、ぼくは疎開先の茨城から、水俣の毛銭を訪ねた。二、三日の予定だったところ、帰りの汽車の切符を、眼の前で毛銭に破かれてしまって、ぼくは十日も滞在した〉（「葦平さんとの縁」）。

傍線部から判断すれば水俣の毛銭を訪ねたのは昭和二十三年一月のこと。毛銭から再会要求の手紙が頻繁に来たのが前年の暮のことであったということになろう。「年譜」作成者がいか

なる資料を用いて前記のような記述をしたかは不明だが（おそらく当該資料を使用していることと思われる）、「暮れ、水俣の毛銭から再会を願う手紙が来る。翌年一月毛銭宅を訪ねる。十日間滞在」とでも書くべきだろう。昭和二十三年一月を再会の時日と定めるゆえんである。

(11) 仲程冒徳氏は〈そのことについて（二度目の上京のこと――松下註）貘は大正十三年とも大正十四年とも書いているが、ちなみに、二度目の上京について記された文章で十三年と記されたのをあげれば、「自分の家に住む夢」「酒友列伝」「自伝」の三篇であり、十四年と記したのは「行きあたりばったり」「小伝」「沖縄はわが故郷」「沖縄の芸術地図」「チャンプルー」「沖縄よどこへ行く」の六篇がある。〉（「山之口貘の短歌」・琉球大学法文学部紀要「国文学論集」第二十七号・昭58・2）という。筆者の調査した結果では大正十三年と記したものは他に「ぼくの半生記」、大正十四年と記したものは「私の青春時代」がある。

(12) 宮城聡氏については『沖縄大百科事典・中巻』（昭58・4・沖縄タイムス社）所収の『生活の誕生』の項に岡本恵徳氏の次のような説明がある。〈1895年（明治28）5月、国頭郡切奥間生まれ。県立師範学校卒業後、小学校教員となる。1921年（大正10）上京、改造社入社。30年退社し小説に専念。34年『東京日日新聞（夕刊）』の〈新人創作シリーズ〉に里見弴の推薦で「故郷は地球」（2・13～3・17、20回連載）を発表、新進作家として注目される〉。

(13) その事情については「淵上毛銭とぼく」「草平と毛銭とバク」に詳しい。後者を引用しよう。〈昭和十八年に毛銭の第一詩集『誕生』が出た。それに序文を書けと来たので、ぼくの柄ではないからとなんども辞退したのであつたが、毛銭は諦めてくれなかつた。かれの詩集『誕生』に序詩として「チェロ」と題する次の詩を書いて贈つた次第である〉。また『誕生』の「後記」に毛銭は次のように書いている。〈痛い体に、詩の絃を張つて、昭和十三年からの作品がまるで嘘のようになつてしまつた。貘さんが「詩が鳴つた」と書いてくれたけれど、どんな音色であるか自分では見当がつかない。いゝ音を弾出すまでの苦労はいくらでもしたいと望んでゐる〉。「後記」の制作付記は「昭和十七年十二月中旬」、序詩「チェロ」のそれは「昭和十七年十二月十八日」である。「後記」の記述から判断すると「十二月中旬」時点で「チェロ」が到着していることは確かだがその場合「中旬」という付記は気になる。在京の貘が十八日に「チェロ」を清書して水俣の毛銭に郵送したとして東京から「中旬」内に届くかという疑問が生じるからである。だがここは二十日以内――いわゆる中旬ギリギリ――に届き届くや否や多くの人々への謝意を込めて詩集の総括的文章としての「後記」を一気呵成に書きあげたと見たほうが妥当であろう。著者にとって最も大切な「後記」の付記であるだけに敢えて「中旬」と書いたことの意味を重視しなければなるまい。思うにこのときの貘の郵送手段は速達であろう。毛銭は電報や速達をよく利用するのだがおそらくこのときは出版のため急を要していたはずでありそれらを利用したことが予想される。それに応えるかのように貘も速達を利用して早急に序詩となる「チェロ」を書いて郵送したものと思われる。〈なんども辞退したのであつたが、毛銭は諦めてくれなかつた〉からである。『誕生』にはほかに加藤

介春の序と梶浦正之の序詩があるのだがちなみにその付記を示せばそれぞれ「昭和十七年十二月十四日夜」、「昭和十七年師走」である。

（一九八八・九月稿）

――九州大学大学院博士課程――

〈資料①〉

自分のこと・淵上のこと　　山之口　貘

再度、上京してまもなくのことであつたから、大正の末のあたりである。ある日、江戸川橋を護国寺の方へ渡ると、すぐ右の路地へ這入つた突き当りの崖下の左側に、佐藤春夫氏の家があつた。玄関から見透しのつく座敷に、氏はうしろむきになつて椅子に腰をかけてゐたのだが、こちらを振りむいたまゝで、面倒くさゝうに「なにか用か」と怒鳴るみたいにどらごゑで云つた。用がなければ来る筈もないのにとぼくはおもひながら、「詩の原稿を見ていただきたいんですが」と、玄関に立つたまんまで答えると、「見てやれないことはないが、それをどこかへ世話してくれといふのなら迷惑だ。」と云つた。「見ていただくだけで結構なんですがね。」と食ひさがると、「それならば、今日は駄目だがまた来たまへ、通つてゐるうちには見てやれるだらう。」と云ひ棄てて、そのまゝ氏はむかうむきになつてしまつたのである。ぼくは、名前こそ貘ではあるが、なにしろ、琉球くんだりからのぼつと出の文学青年だつたので、いろいろの意味で気が弱く、はじめて見る佐藤春夫といふ実物のポーズやどらごゑそのものゝ云ひ方にふるへあがつて、尻餅をついたおもひをしたのであつた。氏はずつとあとになつてから、昭和八年の新年号の「週間朝日」に「放浪三昧」と題する小説を発表したが、それによると、主人公の大野豹、即ち山之口貘は、ずばりと正直にものを云ふ男として書かれてゐるが、であるとすれば、実はそのずばりも正直も佐藤春夫氏からうけた影響なのだといまでもおもつてゐる。

淵上毛銭と知つたのは、昭和の初年のころで、かれはまだあのころ、詩を書いてゐなかつた。チェロ弾きになるのだと云つて、チェロを弾いてゐる少年なのであつた。その後、逢はないまゝ十年ばかりが過ぎて、ある人がとどけてくれた「九州文学」誌上で、かれが、ぼくの住所を知りたがつてゐることを知つた。それはかれが詩を書くやうになつてからのことで、「あの頃のチェロ弾きが詩を書くやうになつたので貘さんがびつくりするだらう。」とあつた、かれはまもなく、一日おき二日おきぐらゐに手紙か端書を寄越すやうになつたが、逢はずにゐた十年の間を、病気のためベッドの上で暮してゐるとのことであつた。

敗戦後の手紙や端書には、生きてゐるうちに一度逢ひたいといふことしきりで、しまひには速達や電報を寄越した。

ベッド上の毛銭に逢つたのは、別れてから十三年ぶりとかで、かれは、ぼくの顔と天井とを交々に見ながら、詩集「誕生」についての反響をぼくに語り、なかにはぼくの影響をうけてゐるとの感想や批評を寄越した人が幾人もあつたことをぼくに告げた。それについて、「著者自身はどうおもつてゐるのか。」ときくと、「実は自分もさうおもつてゐる。」と毛銭はぽつりと答へた。かれの少年時代のあまのじやく的な一端を知つてゐたぼくは、その素直すぎる答へにあつけなさゝへ感じたのであつたが、毛銭はやがて、「だから苦しんでゐるんぢやないか。」と一言天井に云ひ放つて、すゝり泣きをしてしまつたのである。毛銭の在京中の一時期を世話してゐた○氏夫妻は、毛銭は詩によつて救われたと云つてゐるが、詩はすでにベッドに襲ひつゞけてゐて、十五年もねたつきりの病人さへいぢめてゐたのだ。

〈資料②〉

山之口獏いろ〳〵

本文は、久しく会はない獏氏のことを、最近彼の書いた詩を或る誌で読み急になつかしくなり、当時を思ひ出し別れて以来消息のない所から、或ひは彼の住所でも知る機縁になればと思つて書いてみた。確か六七年前の知り合ひだから可成り前から知つてゐるわけだ、その頃私は私の中学部時代の先生に当る人が本所で喫茶店を開業してゐて、私はそこに預けられた形になつてゐた、で遊び半分にバーテンなどの真似事もしてゐた。そこの店に彼獏氏はしげ〳〵と現はれてゐたのであつた、でその時分は殆ど毎日といつていゝ程会つていたわけになる。尤も口をきく様になつたのはずつと後の話だが、獏氏はその時分は未だ不遇にあり今見たいではなかつた。果して今何れ程よくなつてゐるかは不明だが、その時分彼氏の年齢は幾才位であつたか、私の幼いその頃の経験では一寸判りかねる、茫々とした感じだつた。けれど確か十五才いやそれ以上に私より上であつたことは確かな様だ、私はその頃音楽修行中で、外のことは一切解らなかつたけれど、彼の特徴のある大きな目と、深い憂愁を漂はせたその表情だけは充分に汲取ることが出来た。詰り芸術家の卵がその獏氏の芸術家的陰翳は理解し得た訳だ。骨組のがつしりとした、額の禿げ上がつた線の太い――その位の印象だけしかない。店の女達の話であの何時も決つた時間に来て、何時も決つた座席に付き決つた様に熱いコーヒーを飲む人は詩人だといふ話は聞いてゐた、真夏に熱いコーヒーを飲むなんてあの野郎いやな奴だと一度は確か思つたことも覚えてゐる。私の先生つまり店のマスターはよく獏氏とは話をしてゐた。で大体のアウトラインを知つてゐたゞけだつたが、その頃何かの雑誌で佐藤春夫氏が彼らしいのをモデルにして書いてるのを読み、どうも獏さんのことらしいがと先生に話をした。そうらしい、お前話をして見ろと云はれて、おそらくそんな機会から話す様になつた。そしてモデルが彼氏であつたことに狂ひはなかつた。その時獏さんが佐藤氏の所へと出逗入りしてゐることも聞かされた。爾来よく毎日二人で熱を上げ、彼は私の幼稚な音楽芸術論を聞いてくれたし、私は解らぬながらも彼の詩論を熱心に聞いた。その頃の彼は確か灸鍼の職を持つてゐて、黒い皮カバン中に何時もその道具を入れてゐた。それでやつと喰つてゐたらしい。私が便秘を訴えた時、据えてやると云つたのを拝み倒して止してもらつたこともなつかしい。何時か佐藤氏を一度訪問する約束をしながら、私の生活の急変で、サヨナラも云はず別れる様なことになつてしまつた。彼は沖縄県の産である。永い間の不遇漸く最近に至つて報はれんとしてゐることは、彼のためにも詩壇の為にも誠にうれしき限りである。彼を知るものは実に終始一貫よく粘つたと拍手を送らぬ者はあるまい。だが獏氏よ、ほんとうはこれからだ。私が云ふまでもないが――。何の因果か私も詩を書く様になつたが思へばお可笑しなものさ。彼が拙ない僕の詩を見たら驚いて目をまわすだらうと思ふと愉快でならぬ、彼の詩については何時か書く機会もあるだらうし、そして私は彼の交友時代のことをいつかは一度ものして見るプランを今建てゝゐる。誰方か同人諸氏の中で彼の住所を知つてゐる方が居られたら御一報お手数を賜りたい。さすればこの駄文を書いた甲斐があるといふものだ。

（一四・六・九）

淵上喬

付記　引用作品の旧漢字はすべて現行の新字体に改めた。ただし仮名遣いは原文のままにした。